

梅ノ木沢遺跡第Ⅱ文化層の 斧形石器集中地点の形成過程

富樫 孝志

要旨 静岡県駿東郡長泉町にある梅ノ木沢遺跡第Ⅱ文化層で報告された、斧形石器集中地点で出土した斧形石器6点を個別に検討し、いずれも製作時には打撃を加えない場所への打撃によって分割されており、人為的に破碎された可能性が高いことを指摘した。続いて、斧形石器集中地点の形成過程を検討し、6点の斧形石器が順番に破碎され、集積したことを指摘した。この斧形石器集積地点がある同文化層エリアBは、搬入された石材が、消費されながら分散する過程で形成されたと考えられることから、エリアBは、集団が複数回居住した場所で、斧形石器集中地点は、斧形石器を1～2本程度所有した集団が複数回居住し、斧形石器を同一場所で破碎した結果、形成されたと考えた。この状況を、愛鷹山麓における斧形石器のライフサイクルの最終的な姿を示す一例として提示する。ただ、同一地点で複数回に渡って斧形石器を意図的に破碎した背景の解明は課題として残った。

キーワード 斧形石器、集中地点、集石順、複数回居住

1 はじめに

梅ノ木沢遺跡は、静岡県駿東郡長泉町にある縄文時代～旧石器時代の遺跡である（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009）。

梅ノ木沢遺跡では、休場ローム層の第Ⅵ黒色帯下部～第Ⅳ黒色帯下部で第Ⅱ文化層が報告された。台形様石器と斧形石器を含み、箱根産黒曜石、またはホルンフェルス为主要石材とする点では、愛鷹山麓の旧石器時代編年で第Ⅰ期とされた時期（高尾 2006）では通常の石器群である。

この文化層で特徴的な点は、斧形石器の集中地点が報告されたことである。そして、斧形石器に衝撃痕のような痕跡が見られたことから、使用による破損ではなく、意図的に破碎された可能性があるとして報告された。

筆者はこれまで、愛鷹山麓の休場ローム層第Ⅶ黒色帯～第Ⅴ黒色帯で出土した斧形石器の在り方を検討してきた（富樫 2021a、b、投稿中）。これらの検討では、次の点を指摘した。

愛鷹山麓に集団が入植した後期旧石器時代初頭では、地元石材を使用した斧形石器が使われていたが、愛鷹山麓の環境に適応し、居住が安定してくるにしたがって、緑色凝灰岩といった遠隔石材を使用する強い傾向が生まれた。そして、地元石材を使用したバックアップ用の斧形石器との補完関係を作っていたと考えられた。集団が保有した斧形石器は1～2本程度の数で、黒曜石を豊富に保有した居住当初には斧形石器を持っておらず、黒曜石を消費し、地元石材を補給した

段階で斧形石器を持つようになったと考えられた。愛鷹山麓では斧形石器の製作、リダクションは、ほとんど見られないことから、石材採集地で製作したものを搬入し、集団に管理されながら各地点を移動していたと考えられた。しかし、斧形石器が各石器群で安定した存在になることはなかった。その要因として、当時は愛鷹山麓での資源の予測可能性が低く、石器製作技術として、便宜石器を製作する不定形剥片剥離技術を採用したため、管理石器が発達しにくい状況があったと考えられた。

本稿では、筆者による上記の検討に続き、梅ノ木沢遺跡第Ⅱ文化層における斧形石器の在り方、特に斧形石器集中地点の形成過程とその背景を検討する。

2 梅ノ木沢遺跡第Ⅱ文化層の形成過程

梅ノ木沢遺跡第Ⅱ文化層は、休場ローム層の第Ⅵ黒色帯下部～第Ⅳ黒色帯下部で検出された文化層で、石器の分布から、エリアA～Cの3つの石器集中域が設定された（図1）。これらのうち、エリアAで斧形石器が1点、エリアBで斧形石器が7点出土している。第Ⅱ文化層全体では、斧形石器の他に、斧形石器の破片が7点出土している。エリアBに凝灰岩、緑色凝灰岩製の斧形石器が多い点以外は、箱根産黒曜石、またはホルンフェルス为主要石材として台形様石器を含んだ、当該期に一般的に見られる石器群である（表1）。

この組成表から、先行研究の解釈方法（稲田 2006）を参考に、第Ⅱ文化層の形成過程を読み取る。

エリアAでは、箱根山黒曜石を使用した石器が、出土した石器の8割以上を占めている。箱根産黒曜石製の石核が12点あることも考えると、箱根産黒曜石を搬入した直後の状況を示していると理解できる。

これに対してエリアBは、箱根産黒曜石が多いとはいえ、出土した石器点数の3割を占めるに過ぎない。一方、他の産地の黒曜石やガラス質黒色安山岩など多様な石材を使用した石器が、少数ずつ見られる。これは、石材の分散が進み、エリアBに多様な石材が持ち込まれたためと理解できる。

エリアCは、ホルンフェルス製の石器が出土した石器の9割を占めていることから、ホルンフェルスを搬入した直後の状況を示していると理解できる。

エリアAの形成後、エリアBの形成に至るまで、箱根産黒曜石の消費過程を示す石器群が形成されたと想定できるが、このような石器群は報告されていない。調査区外に存在すると推定される。

同様にエリアCに後続して、ホルンフェルスの消費過程で形成された石器群が存在すると想定されるが、そのような石器群も報告されていない。これも調査区外に存在すると推定される。

エリア間で接合した石器がないことも考え合わせると、エリアA、B、Cは連続して形成されたものではなく、形成時期に相当な時間差があり、それぞれ独立した石器群ということができる。なお、石器の個体別分類が報告されていないため、エリアを超えた個体別資料の共有があったかどうかは不明である。

以上から、斧形石器もエリアAで出土した1点(図1-1)とエリアBで出土した7点(図1-2~8)は、搬入された時期に相当な時間差があったことになる。

エリアBで出土した7点のうち1点(図1-2)は、複数の破片に割れた状態で出土しており、5号石器集中と10号石器集中にまたがって分布している。他の6点(図1-3~8)は、9号石器集中から出土している。5号石器集中、10号石器集中と9号石器集中にまたがって接合した石器はないことから、5号、10号石器集中と9号石器集中は、独立した存在で、形成の時間差を想定できる。したがって、図1-2の斧形石器と図1-3~8の斧形石器にも、搬入時期に時間差があったと考えられる。

エリアA、エリアBの5号石器集中と10号石器集中を形成した集団が所有した斧形石器は、確認できる限りでは1点ずつということになり、当時の集団が所有していた斧形石器が1~2点であったという筆者の

表1 梅ノ木沢遺跡第Ⅱ文化層の石器組成

エリアA										
器種\石材	Ob				Ba	G. An	Pe	F. Tu	Sh	
	Ng	Kz	HK	不明						
台形様石器			3							
スクレイパー			4							
石鏃			1							
斧形石器							1			
石核			12							
剥片類	2	1	163	25	1	1		2	2	
合計	2	1	183	25	1	1	1	2	2	

エリアB										
器種\石材	Ob				G. An	F. An	Ag	HF	Tu	G. Tu
	Ng	Iz	HK	不明						
台形様石器	1									
スクレイパー	1		2				2		1	
斧形石器									3	44
石核	1		3							
剥片類	20	4	58	31	3	3	3	1		5
合計	23	4	63	31	3	3	5	1	4	49

エリアC				
器種\石材	Ob			
	Iz	HK	Ja	HF
石核				1
剥片類	1	2	1	45
合計	1	2	1	46

石材名凡例 Ob: 黒曜石 B. An: ガラス質黒色安山岩 F. An: 細粒安山岩
 Tu: 凝灰岩 F. Tu: 細粒凝灰岩 G. Tu: 緑色凝灰岩 Sh: 頁岩
 Ag: メノウ Ba: 玄武岩 HF: ホルンフェルス Ja: 碧玉 Pe: 橄欖岩
 黒曜石産地凡例 Ng: 長野県 Kz: 東京都神津島 HK: 神奈川県箱根 Iz: 静岡県伊豆半島
 礫石器と同じ石材の剥片類は除く

検討(富樫 2021a、2021b、投稿中)と合致する。

一方、エリアBの9号石器集中で報告された斧形石器集中地点では、6点の斧形石器がまとまっており、梅ノ木沢遺跡第Ⅱ文化層だけでなく、愛鷹山麓の旧石器時代遺跡全体の中でも、特異な状況を示している。

本稿では、この特異な状況を示す斧形石器集中地点の形成過程を検討する。

3 斧形石器集中地点の形成過程

(1) 斧形石器集中地点の状況

斧形石器集中地点では、約1m四方の中から斧形石器6点と黒曜石の剥片などが出土した(図2)。出土層は、第Ⅴ黒色帯が中心である。出土したレベルは、図2の断面投影図にトーンで示したあたりに集中していることから、斧形石器は、平坦に近い場所で面をそろえて出土したことがわかる。さらに、断面投影図のトーンの中に入っている斧形石器の平均重量は115.4gであるのに対して、トーンから外れている斧形石器の平均重量は18.4gである。このことから、重量の重い斧形石器の破片は、出土レベルがそう傾向があるのに対して、重量の軽い斧形石器の破片は、埋没後に上下方向に移動したと考えられる。

斧形石器が、平坦地で面をそろえて出土したことは、斧形石器集中地点が短期間のうちに形成されたことを示唆している。

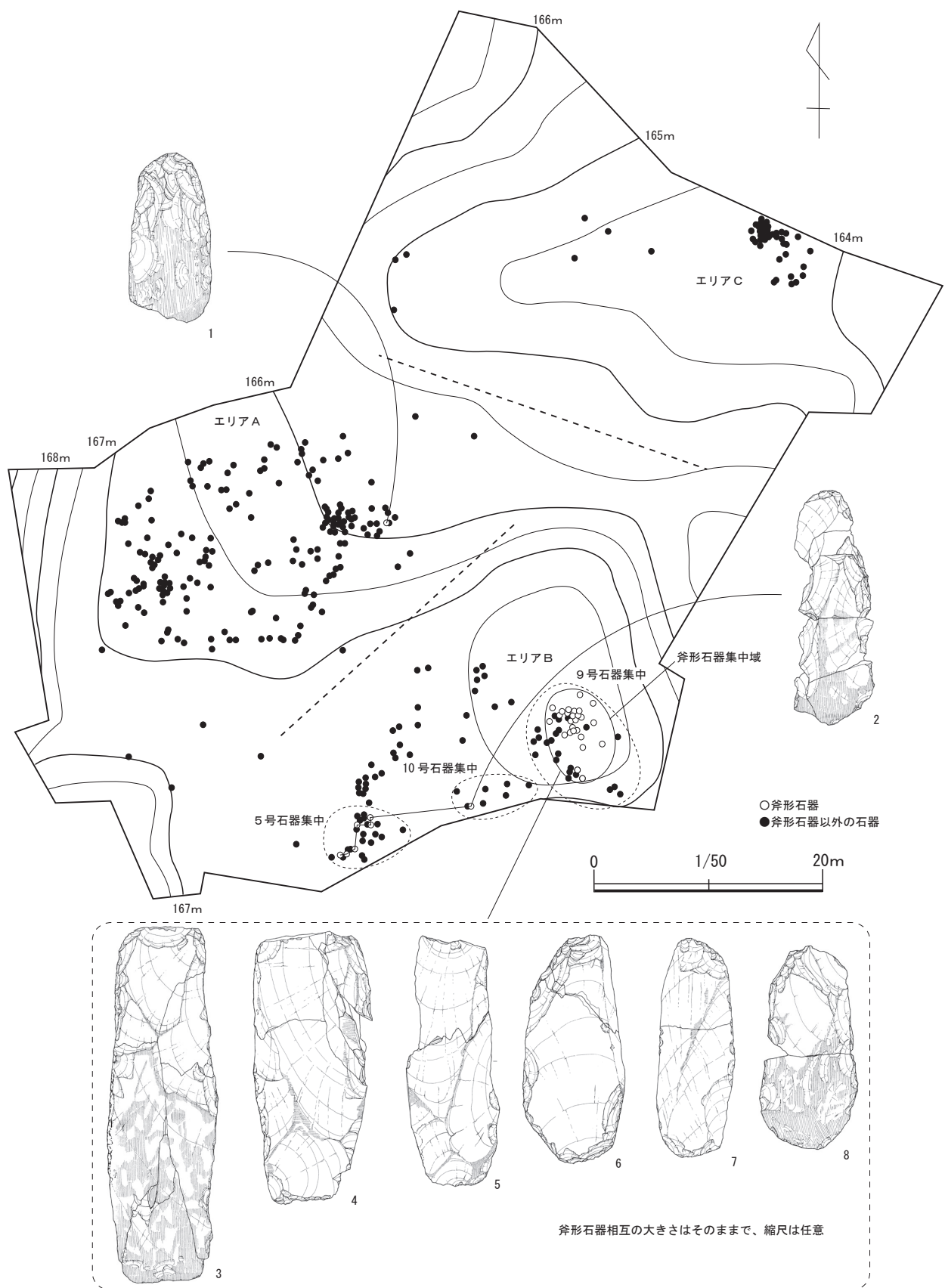


図1 梅ノ木沢遺跡第Ⅱ文化層の石器分布

(2) 斧形石器の個別検討

個々の斧形石器の状況を検討し、その後に改めて斧形石器集中地点での出土状況を詳細に検討する。以下では、報告書に記載された斧形石器の番号をそのまま使用する。

斧形石器 55 (図3)

緑色凝灰岩の板状の剥片を素材として、主として上下両端を加工している。上端には自然面が残し、左右両側縁では、製作時の加工が少ないことから、素材の形状を大きくは変えていないと考えられる。

研磨は弱く、実測図左面の稜線部分で研磨痕を確認できる程度である。実測図右面は、部分的に研磨痕を実測してあるが、確認は困難である。

実測図右面の刃部には、細かい剥離が見られる。いずれも刃部先端からの剥離で、製作時に縁辺を薄く剥

がす剥離とは異なり、刃部を潰すような衝撃に伴う剥離である。使用による潰れの可能性がある

この斧形石器は実測図に「★」で示した部分への打撃で分割されている。斧形石器の中央部分で、ここを叩けば、斧形石器が折れることは明らかである。その部分に打撃が加わったということは、それが人為的なものであるなら、意図的に破碎したことになる。

なお、図3に「分割後の加工」と示した部分には、この斧形石器が折れた後に入れられた剥離がある。斧形石器が折れた後、破片を別の石器に加工しようとしたのかもしれない。

斧形石器 56 (図4)

緑色凝灰岩の板状の剥片を素材にして、縁辺に小さな剥離を入れて加工している。素材の形は大きくは変わっていない。

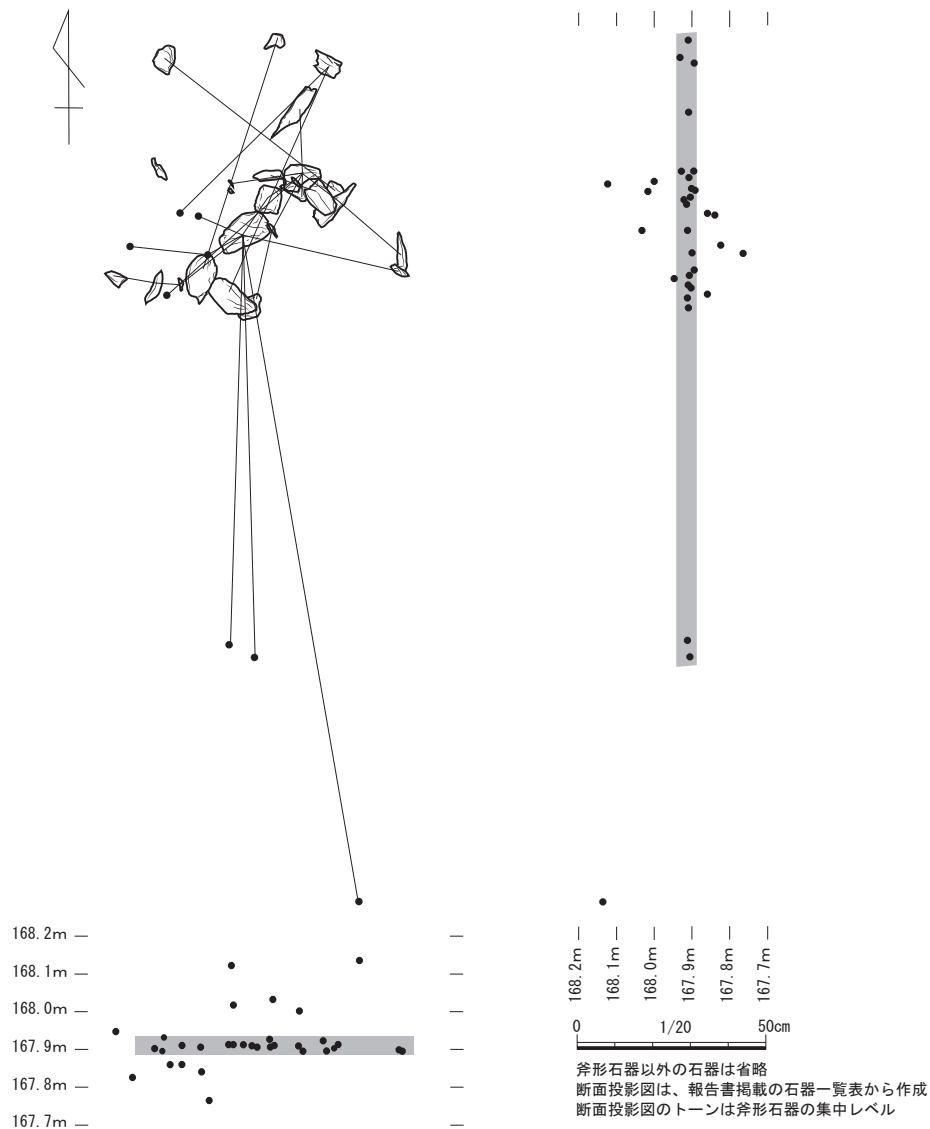


図2 斧形石器集中地点での斧形石器出土状況

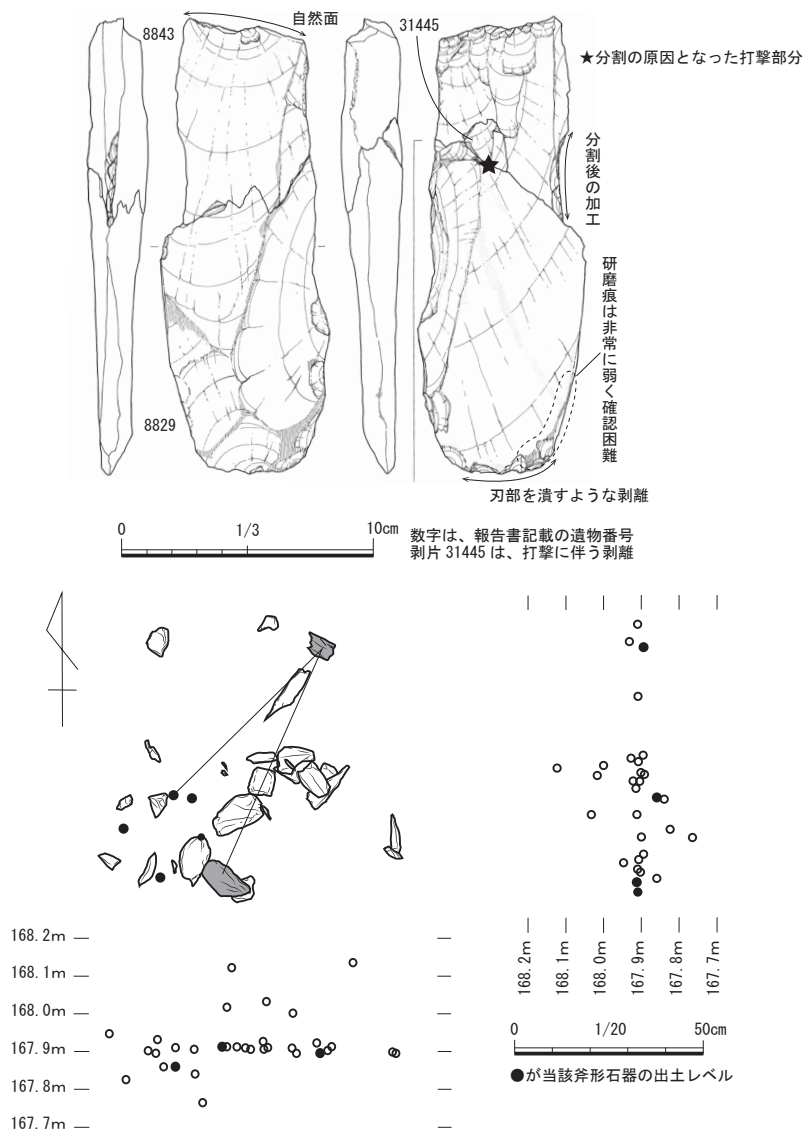


図3 斧形石器 55 の実測図と出土状況

研磨痕は両面に見られ、稜線などが摩滅して光沢が出るほどに磨かれている。

この斧形石器は、2箇所への打撃によって大きく4つの破片に分割されている。いずれの打撃も斧形石器の中央付近で、製作時には絶対に打撃を加えない場所である。これが人為的な打撃であるなら、意図的に破碎したことになる。

分割された破片は、遺物番号 8835 と 8836 を中心に四方に広がるように分散している。

斧形石器 57 (図5)

緑色凝灰岩の板状の剥片を素材にして、縁辺を加工して形を整えている。図5に「自然面」とした部分に石理状の平坦な自然面が残っている。全体的に加工に伴う剥離が少ないことから、素材剥片の形は、大きくは変化していないと考えられる。

刃部に研磨痕は見られず、細かい剥離が入って潰れたようになっている。硬い物に何度も当たったと考えられ、使用痕の可能性がある。これが使用痕であるなら、この斧形石器は、刃部を磨かないまま使用したことになる。

図5に「分割時の打撃場所」と記した縁辺に複数回の打撃が加えられた結果、斧形石器が2つに折れ、8832 と 8833 に別れ、さらに複数の小片が生じている。斧形石器の製作を目的とした打撃であれば、斧形石器の表面を薄く剥離するのが通常である。しかし、剥離された剥片のほとんどは、極端に横長で短く、厚さもあり、表面を薄く剥がしたとは言い難いものである(図5)。縁辺に強い衝撃が加わって、縁辺が破碎した破片と言った方が良い。

同一の縁辺に複数回の打撃が加わることは、自然の

状況では想定しにくいことから、この斧形石器は、人為的に破砕された可能性が高い。

分割された破片は、比較的大型の破片 8832 と 8833 を中心に四方に広がるように分散している。中でも 3 点の小片が斧形石器集中地点から大きく外れた場所で出土している。

斧形石器 58 (図6)

凝灰岩製で、加工による剥離が進んでいることと、剥離面が観察できないほどに研磨が進んでいることか

ら、素材の形状は不明である。刃部を中心に両面を丁寧な磨いてあり、光沢がある。報告書では、刃部の研磨と再生が繰り返されたと推定されている。

2つに折れていて、折れた面を観察すると、図中に「★」で示した部分に打点がある。打点部分に衝撃痕はないが、斧形石器の中央部分であり、製作時には絶対に叩かない部分である。このことから、この打撃が人為的なものであるなら、斧形石器を意図的に破砕したことになる。

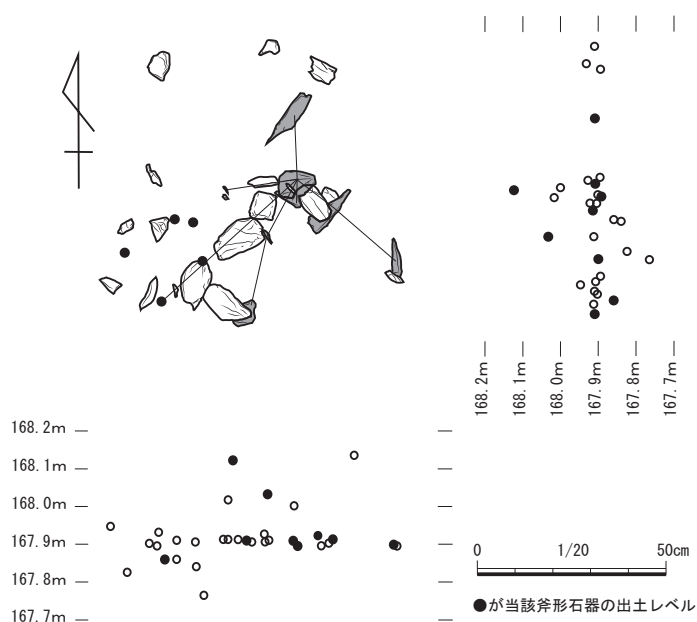
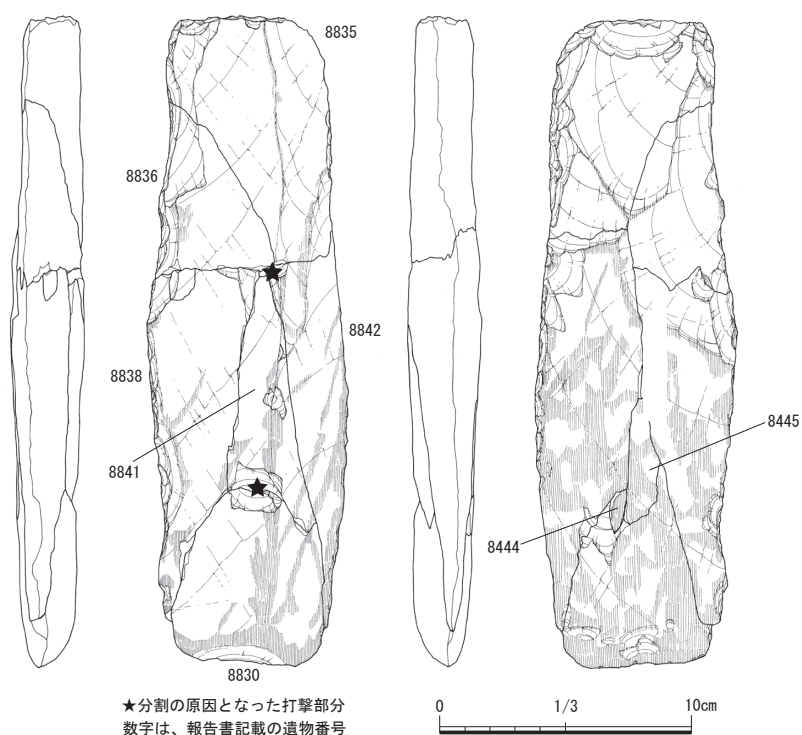


図4 斧形石器 56 の実測図と出土状況

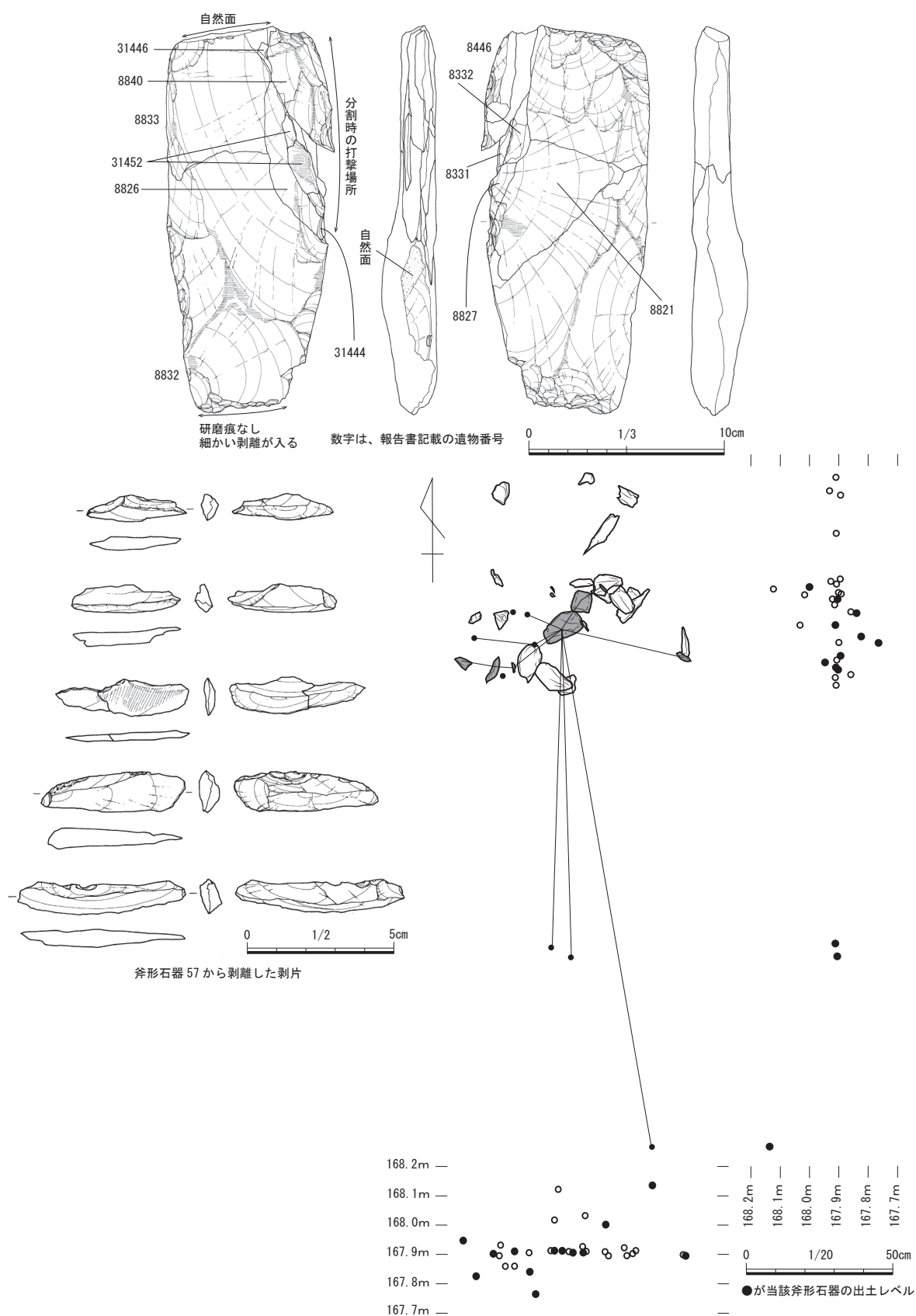


図5 斧形石器 57 の実測図と出土状況

斧形石器 58 の破片は 50 cm 程度離れた場所で出土している。後述するが、この斧形石器は、斧形石器集中地点で最初に置かれた可能性が高い。

斧形石器 59 (図 7)

緑色凝灰岩の板状剥片を素材としている。両側縁から加工して全体の形を整えている。加工の剥離は、斧形石器の縁辺にとどまっているため、両面には素材面が大きく残っている。また、両側縁と上端に石理面が残っている。素材の形は、あまり変っていない。

報告では、刃部に入っている剥離面の稜線に、研磨痕と思われる光沢があるとの記載があるが、拡大鏡で観察しても、筆者には確認できなかった。

ここで指摘したいことは、研磨痕の有無ではなく、刃部の先端が潰れたようになっており、この潰れに伴って細かい剥離が入っていることである。刃部に

入っている剥離に研磨痕が見られるのであれば、この剥離は製作時の加工に伴うものである。しかし、研磨痕が見られないうえに、刃部先端を尖らせるような剥離ではなく、むしろ、刃部の先端を潰すような衝撃に伴う剥離と考えられることから、使用による剥離の可能性の方が高いと考えられる。

この考えが正しいのであれば、この斧形石器は、刃部を磨かないまま使用したことになる。

この斧形石器には、図中に示したように、次の部分に光沢が見られる。

・縁辺部の頂部、石理面、緩やかに凹んだ剥離面

いずれも斧形石器を製作する際には研磨しないと思われる部分で、特に凹んだ剥離面を研磨するのは不可能である。着柄による摩滅と考えるのが妥当と思われるが、着柄の有無は検討が困難であるため、ここでは、

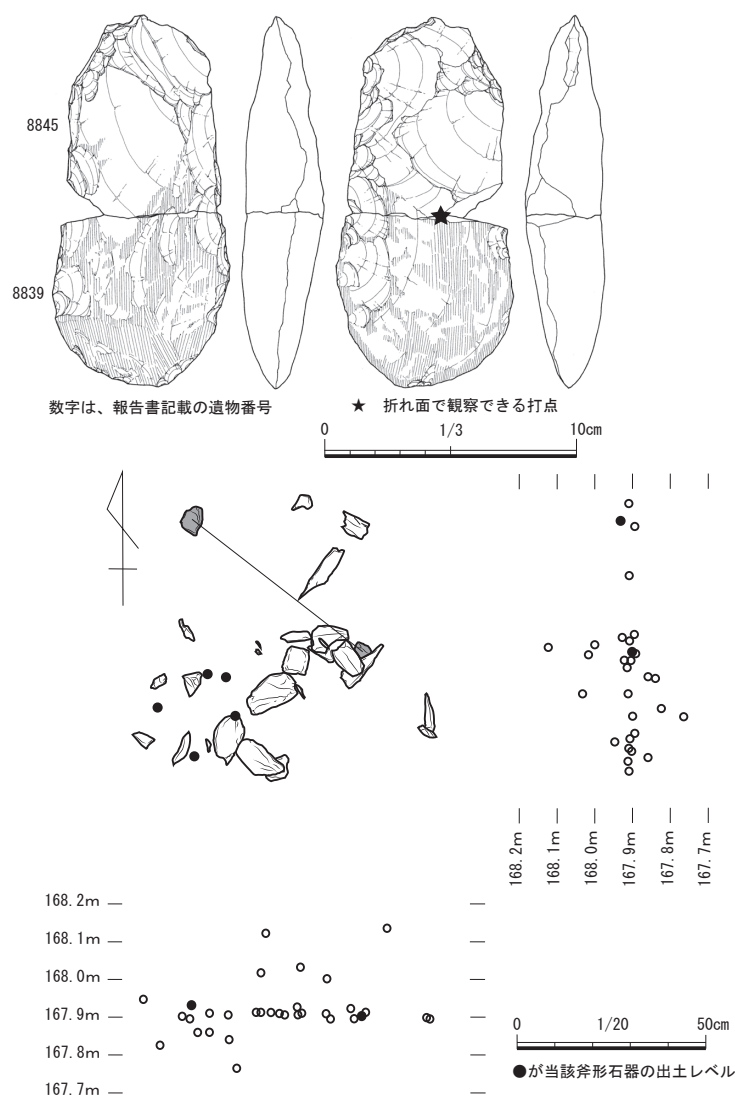


図 6 斧形石器 58 の実測図と出土状況

その可能性に指摘にとどめる。

以上から、この斧形石器は研磨しないまま使用した可能性がある。

この斧形石器は、図中に「★」で示した部分への打撃で分割されている。縁辺への打撃ではないため、製作に伴う打撃ではない。この打撃が人為的なものであるなら、意図的に破碎されたことになる。

破碎された破片は、遺物番号 8828 を中心に飛び散ったように分散している。

斧形石器 60 (図8)

緑色凝灰岩の板状剥片を素材としている。側縁に自然面が大きく残っており、その自然面を打面として剥離された剥片を素材にしている。素材剥片を剥離した際の打点が残っているうえに、縁辺からの加工が少ないことから、素材剥片の形はほとんど変わっていない

と考えられる。

図中に示したように、自然面と剥離面の境界の稜線が丸みを帯びていることから、摩滅していると考えられ、着柄による摩滅の可能性がある。

報告では、刃部に研磨痕はないとされているが、拡大鏡で観察したところ、光沢が観察できたことから、使用による摩滅の可能性が考えられる。いずれにしても肉眼で観察できるような研磨痕は認められない。

刃部の先端は潰れたようになっている。刃部に見られる剥離は、この潰れに伴うものであることから、使用に伴う衝撃による剥離の可能性が考えられる。この考えが正しいとすると、この斧形石器は刃部を研磨しないまま使用したことになる。

この斧形石器は、図中に「★」で示した部分への打撃で折れている。折れた破片は近接した場所で出土し

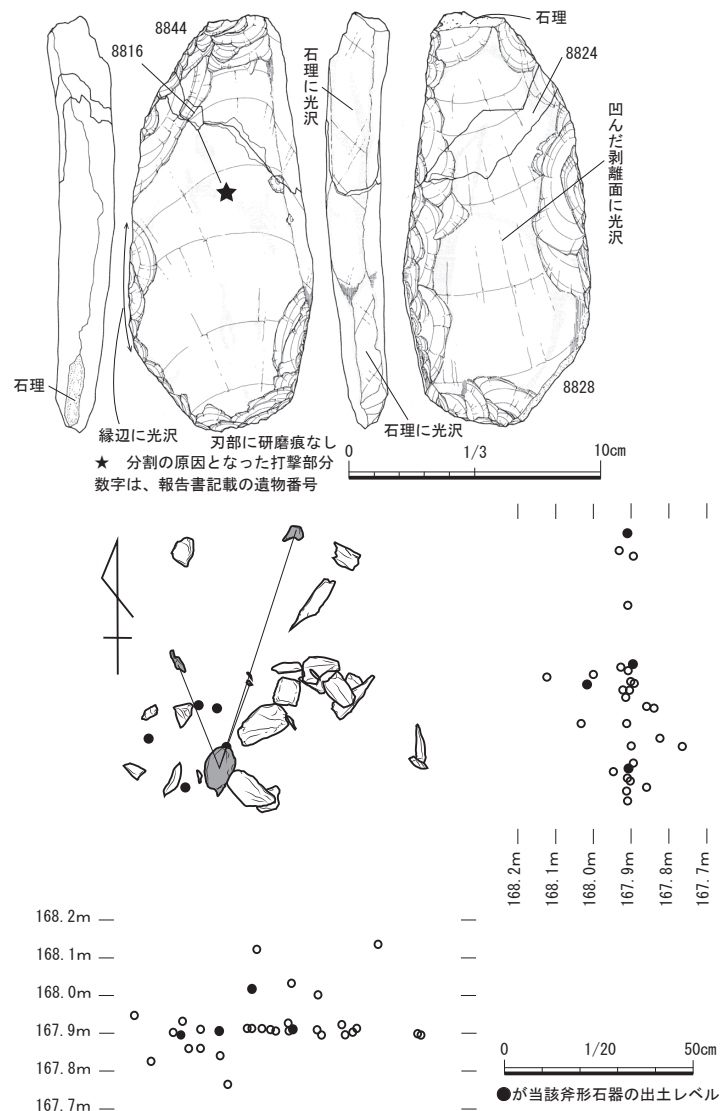


図7 斧形石器 59 の実測図と出土状況

ている。この打撃箇所は、斧形石器の中央付近で、これが人為的なものであるなら、この斧形石器は意図的に破砕されたことになる。

(3) 斧形石器の集積順

ここまでの検討で、斧形石器集中地点で出土した斧形石器は、いずれも意図的に破砕された可能性が高いことを指摘した。

次に、斧形石器が集積した順番を復元する。ここでは次の考えを前提とする。

- ・ 斧形石器が重なっている場合は、下から重なった順番で置かれたと解釈する。
- ・ 遺物が埋没後に上下移動することは周知のことであるが、直上、あるいは直下にある遺物を飛び越えるような移動はないと考える。

報告では、次の順番が想定されている。

58 → 55・56・57 → 59・60

本稿では、さらに詳細に検討し、6点の斧形石器が集積した順番を復元する。順番を復元できれば、斧形石器は順番に集積したことになり、順番を復元できない状況であれば、破砕された斧形石器が一括で投棄された可能性が高くなる。

まずは、斧形石器が重なっている順番を示す。

図9の断面投影図A - Bでの重なりは、下から次の順である。

58、56、60

56の上に60が乗っている状況は、断面投影図A - Bでは2箇所を確認できる。

図9の断面投影図C - Dでの重なりは、下から次のとおりである。

56、55、59・57

この中で、57と59の関係は次のとおりである。

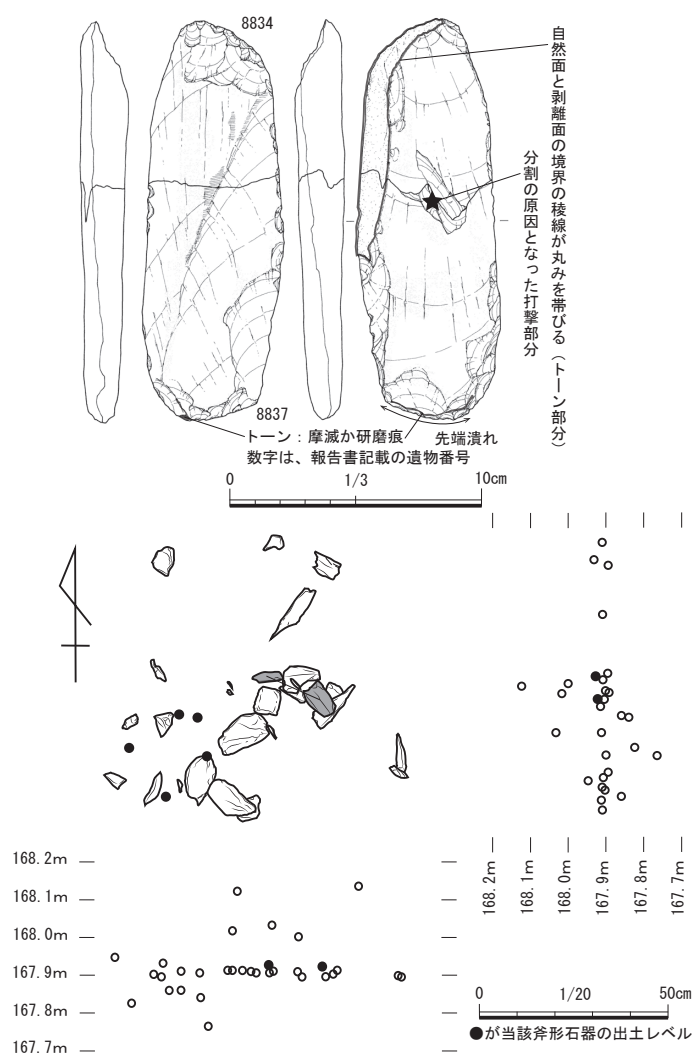


図8 斧形石器60の実測図と出土状況

57の破片8827は、断面投影図では、59の破片8828の上に乗っているように見えるが、出土位置は重複していないので、8828よりも上のレベルで出土しているというのが正確である。一方、57の破片31446は、59の破片8828の下で出土している。以上から、57と59の前後関係は決定できないことになる。

図9の断面投影図E-Fでの重なりは、下から次のとおりである。

56、57

以上の斧形石器の重なりからは、次の順番が復元できる。

58 → 56 → 60

56 → 55 → 59・57

56 → 57

上記から、58 → 56 → 55 → 59・57の順番で置かれた可能性が高いことが指摘できる。60は、56の上に乗っていることは事実であるが、55、57、59とは、出土状況上の接点がない。60と55、57、59との関係を強いてあげるなら、斧形石器の大型の破片が集中しているレベル（図9のトーン部分）では、60が最も高位で出土していることがあげられる。大型破片の出土レベルが集中しているということから、大型破片の上下移動は少なかったと考えられる。その中で60が最高位で出土しているということを、強引を承知の上で解釈するなら、60が他の斧形石器よりも、後に置かれたことを示唆していると考えられる。

したがって、斧形石器60は、他の斧形石器よりも後に置かれた可能性が考えられる。

以上から、斧形石器集中地点に斧形石器が置かれた順番は、次の通りになる。

58 → 56 → 55 → 59・57 → 60

4 斧形石器集中地点を形成した集団

これまでの筆者の検討（富樫 2021a、2021b、投稿中）で、愛鷹山麓に居住した当時の集団が所有した斧形石器は1～2本程度で、斧形石器を所有しなかった期間も相当にあったことを指摘した。

梅ノ木沢遺跡第Ⅱ文化層のエリアAとエリアBの5号石器集中は、それぞれで斧形石器を1点含んでいることから、この時期の通常の斧形石器の所有の仕方である。これに対して、エリアBの9号石器集中では、斧形石器を6点含み、斧形石器の集中地点を形成している点で、愛鷹山麓での斧形石器の所有の仕方としては、異例である。

報告された石器一覧表から、石器集中単位で石器組成を復元することが困難であるが、報告書を見る限り、9号石器集中には、台形様石器1点、スクレイパー4点、石核2点を確認できる。これは、この時期の通常見られる石器組成で、単一集団が残したと言っても良い規模である。したがって、斧形石器が6点出土しているからと言って、多くの集団が集結していたとは考えられない。斧形石器が6点出土した点だけが異例な状況なのである。

単一の集団が斧形石器集中地点を形成したという前提に立つと、斧形石器集中地点の形成には、次の2つの可能性が考えられる。

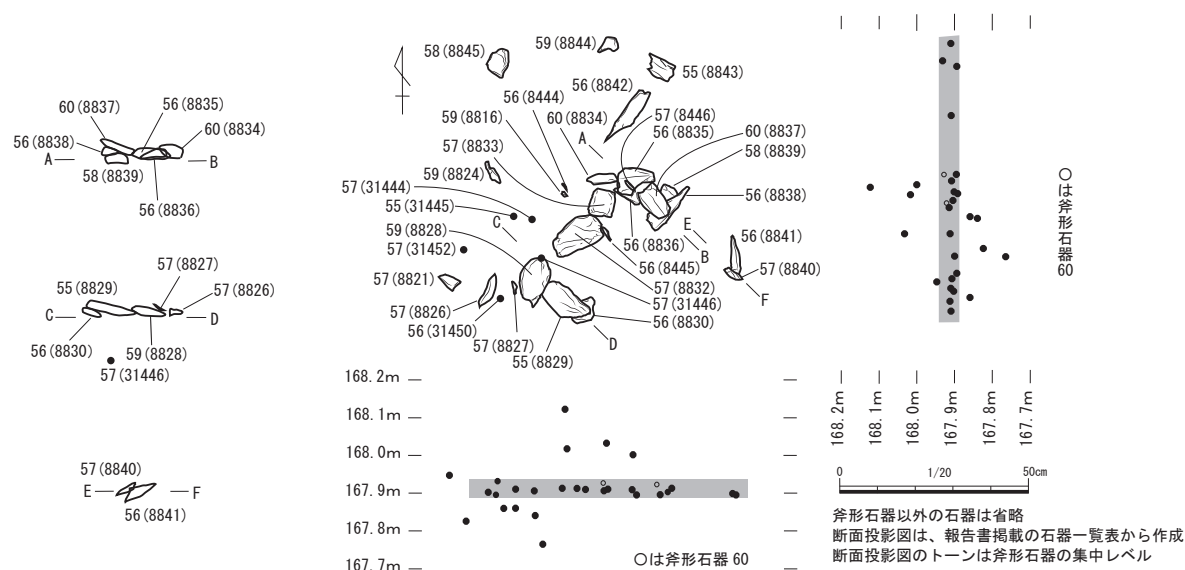


図9 斧形石器集中地点の出土状況の詳細

① 9号石器集中を残した集団が6点もの斧形石器を所有して、それらを意図的に破碎して、斧形石器集中地点を形成した。

② 斧形石器を1～2点程度所有した集団が、複数回に渡って9号石器集中に居住し、石器集中を形成しながら、同一場所で斧形石器を破碎して、その結果、斧形石器集中地点が形成された。

①の場合、特定の集団が6点という、この時期では破格の点数の斧形石器を所有し、それらを先に指摘した順番に破碎して同じ場所に集積したことになる。

②の場合、1～2本程度の斧形石器を所有した集団が、複数回に渡ってこの場所に居住し、同一場所で斧形石器を破碎し、集積したことになる。

①と②は両極端の場合であって、中間にいくつかのパターンを想定できる。しかし、中間のパターンまで含めて複雑な検討をするよりも、①と②に絞って、どちらの可能性が高いかを検討する方が、集団の行動を描き出すのに有効である。

梅ノ木沢遺跡第Ⅱ文化層で報告された各エリアの状況は、先述の通り、エリアAは箱根産黒曜石を入手した直後、エリアCはホルンフェルスを手に入れた直後の状況を示していると考えられた。

これに対してエリアBは、箱根産黒曜石がやや多いものの、突出することなく、むしろ、多様な石材が少量ずつみられる点に特徴があった。これは、エリアAやエリアCのように、特定の石材を手に入れた場所から、石材を消費しながら、周辺に石材が分散する過程を経て形成された場所と考えられた。

石材が分散したのは、集団が動いたからであって、エリアBに多様な石材が分散してきたということは、集団が複数回この場所に居住したことを示している。

このように考えると、斧形石器を1～2本所有した集団がエリアBに居住し、先に示した順に斧形石器を破碎した結果、斧形石器集中地点が形成されたと考える方が妥当と考えられる。

このように考えると、①の可能性よりも②の可能性の方が高いことになる。

次に問題になるのは、同一地点で斧形石器を破碎していたことである。これは、現状では全国でも類例がないため、梅ノ木沢遺跡第Ⅱ文化層だけでの検討に終始せざるを得ない。

現在のところ愛鷹山麓では、旧石器時代の斧形石器のライフサイクルのうち製作地点は、沼津市の場遺跡（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010）で報告

された凝灰岩製石器の接合資料にその可能性がある。製作後の斧形石器は、集団に管理されながら、遺跡間を移動したことがうかがえる（富樫 2021a、2021b、投稿中）。その過程で、他の地域では、変形による再利用と消費（長崎 1990）が見られるが、愛鷹山麓では報告例がなく、使用された斧形石器の最終的な形態は不明のままである。

ここに1つの可能性として、梅ノ木沢遺跡第Ⅱ文化層の斧形石器集中地点に見られた、破碎による廃棄があることを提示したい。

ただ、斧形石器を意図的に、しかも同一地点で破碎し、集積を形成した背景は不明のままであるため、今後の課題としたい。

最後になりましたが、梅ノ木沢遺跡第Ⅱ文化層の斧形石器の観察に際して、山岡拓也氏から多くの御教示をいただくとともに、有益な意見交換をすることができました。

山岡氏に厚く御礼申し上げます。

引用・参考文献

- 稲田孝司 2006 「環状ブロック群と後期旧石器時代前半期の集団関係」『旧石器研究』第2号
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009 『梅ノ木沢遺跡Ⅱ（旧石器時代編）』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010 『的場古墳群・的場遺跡』
- 高尾好之 2006 「東海地方の地域編年」『旧石器時代の地域編年の研究』同成社
- 富樫孝志 2021a 「静岡県愛鷹山麓における後期旧石器時代初頭の斧形石器」『東海石器研究』第11号 東海石器研究会
- 富樫孝志 2021b 「愛鷹山麓における環状ブロック盛行期の斧形石器」『地域と考古学Ⅱ』向坂鋼二先生米寿記念論集刊行会
- 富樫孝志 「沼津市土手上遺跡における斧形石器の運用」『静岡県考古学研究』投稿中
- 長崎潤一 1990 「後期旧石器時代前半期の石斧－形態変化論を視点として－」『先史考古学研究』3